

先行予約 受付中!!

ご予約特典!

予約
価格 **1,700円**

(本体:1,545円+税10%)

+

オリジナル クリアファイルを
プレゼント!



生田長江

いくたちょうこう

1882年〜1936年、翻
訳家として、ニーチェを
日本で初めて本格的に紹
介したほか、当代の作家
を論じる文芸批評家、社
会批評家として活躍。

主人公・律の目を通して描かれる、
日野町出身の文学者・生田長江と彼を取り巻く人々。
『青鞥』の創刊、大正デモクラシー、関東大震災――
沸騰し、揺れる時代の中、
誰もが火口に立っていた。

大正〜昭和前期、いち早く
「ジェンダー」の視点を提起した
文学者・生田長江と、
一人の女性の物語。



大正〜昭和前期
たぎる時代を
果敢に生きた
生田長江と
一人の女性の物語

【生田長江】
いくたちょうこう 1882年〜1936年、
翻訳家として、ニー
チェを日本で初め
本格的に紹介したほ
か、当代の作家を論
じる文芸批評家、社会
批評家として活躍。

小説「生田長江」を出版する会

発売日 **2024年2月3日(土)**

予価 **1,980円**
(本体:1,800円+税10%)

発行/小説「生田長江」を出版する会

※装丁イメージは変更の場合がございます
※写真：鳥取県立図書館

予約
申込書

ご住所 〒

お名前

電話番号

FAX

メールアドレス

お引き渡し方法

事務局 ・ 紹介者 ・ 直接発送 ・ その他

いずれかに○をお付けください

ご購入冊数

冊

紹介者名

事務局、紹介者を介してお渡しする場合、本と引き換えに代金をお支払いください。郵送の場合、送料は実費を負担いただけます。
同封の請求書を以て、本代と送料を、所定の口座に振り込んでください。なお振込料はご本人様の負担となりますので了解ください。

※遠方の方に郵送でプレゼントされる場合などについては、別途ご相談ください。

問合せ
申込先

小説「生田長江」を出版する会

[事務局/日野町図書館内] 〒689-4503 鳥取県日野郡日野町根雨129-1

TEL 0859-72-1300 FAX 0859-72-1320

E-mail hinotosyo@book.town.hino.tottori.jp

インターネットでの
お申し込みはコチラ!

フォームからお申し込みください



新作『火口に立つ。』 に寄せて

日野町は、「性別、年齢、障がいの有無、国籍などにとらわれず、誰もが居場所と役割を持ち、活躍するまちづくり」を目指している。

日野町出身の偉大な翻訳家にして評論家、また劇作家でもある生田長江は、女性解放運動にも関心を持ち、平塚らいてうに「青鞥」の発刊、青鞥社の結成を勧めるなど、多くの女性達を世に送り出した。また、病気や差別にも負けず信念を貫き、最後まで文筆活動を続けた。日本の近代文学に登場する高名な作家のほとんどと関係があるといっても過言ではない。

そんな長江の生き方の原点は、小説『火口に立つ。』の終盤に出てくるふるさと日野町で培われた。この小説をきっかけに、長江が生まれ育った日野町に、ぜひおいでください。

日野町長 塔田淳一

「日本文学界の名パイロット」長江のことをこう称賛したのは、菊池寛である。長江は、評論家、翻訳家としての作品を残すとともに、佐藤春夫や鳥取県出身の生田春月をはじめ、多くの後進を世に送り出している。鳥取県知事平井伸治氏や、前鳥取県知事片山善博氏の話の中にも長江は登場する。大きな業績を残した長江であるが、町民の方にさえあまり広く知られていない。それは、執筆した書物等が難しいということだけではない。

ぜひ、小説『火口に立つ。』を読んでいただき、より多くの方に生田長江の存在を知っていただきたい。

日野町教育長 生田 求

生田長江さんは当時、生田春月や大江賢次他、鳥取県から中央を目指した多くの若者たちを支援したことで知られており、松本薫さんの筆の力で、そうした功績や人となりを、親しみやすい内容でわかりやすく、たくさんの方に知ってもらえるのではと期待しています。本篇に登場する女性の気持ちを自分と重ねながら、小説の世界に入り込んで堪能できる日を心待ちにしています。

鳥取県西部総合事務所 日野振興センター所長 吉岡佐知子

「パッチワークではなく編み物のように書いていくので、どのような展開になるのか自分でもわからない。」松本薫さんが小説『天の虫』を執筆されているときに話された言葉が、私の記憶に刻まれている。読者を物語の中に引き込んでいく秘密がそこにあるのかもしれない。生田長江の小説『火口に立つ。』もまた、多くの読者を魅了されることだろう。

江府町長 白石祐治

松本薫さんによる待望の日野郡第4作目の出版。

ワクワク、ドキドキの冒険が再び始まる!

不屈の評論家・生田長江の人物像に近づき、彼の生き方や功績などを知る。

ぜひ、多くの方々に手に取っていただき、感動してほしい!

日南町長 中村英明

生田長江は「近代の超克^{ちようこく}」という言葉をいち早く、100年前に叫びました。「近代」というのはお金が最も重要視される社会です。長江は「資本主義も社会主義も『近代』が生んだ双生児だ。貧困などの問題点は解決していない」として、それを乗り越える(超克する)新しい社会を望んでいました。

近年、「社会的共通資本」などにより模索はされていますが、長江が示した課題は残されたまま。ジェンダーの問題なども併せ、この小説にはきっと、そうした永年の課題解決へのヒントがぎゅぎゅと散りばめられているはずです。

「白つつじの会」 生田長江顕彰会会長 河中信孝

松本薫さんに小説『TATARA』を執筆いただいたのは2010(平成22)年のこと。明治という時代、主人公の生涯とともに、たたら製鉄の炎が燃え盛る奥日野を見事に描いていただき、たたら歴史への認識が一挙に広がり、深まりました。新作『火口に立つ。』は、その続編ともいべき作品だと聞いており、生田長江という偉人を輩出したバックボーンには、たたら産業によって培われた日野の文化的土壌があったものと推察され、いよいよ出版に期待が高まります!!

伯耆国たたら顕彰会 会長 田貝英雄

長江先生が延暦寺住職竺堂大典和尚に漢学を習いに通っておられた青年期・その後文学者として活躍しておられた半世紀は、延暦寺にとって飛火火災で伽藍焼失後、檀信徒一丸となって半世紀に亘り復興に向けて苦勞した時期と重なります。

明治・大正・昭和初期と激動の時代、長江先生の文学者としての生き様を通じて、日野郡また延暦寺の歴史にも思いを巡らせながら松本薫先生の小説を拝読出来る事を楽しみにしております。

延暦寺住職 飯田頼昭

地元根雨や近藤家、貝原等の描写はきっと出だしから地元読者を引き付けるだろう。明治、大正、昭和と生きた“知の巨人”生田長江の生きざまを背景に、生田家を訪れる人々の考えに強く影響を受けながら、律^{りつ}が女性として自分を再生していく姿にはとても共感する。女性の参政権もない時代に、男女のあり方に疑問を持ち、自己表現していかうとする女性たちの姿はたくましく凛として、今を生きる私たちも大いに学びたい。

男女共同参画 推進会議ひの会長 山根美奈子